





俳諧燕都枝折

三編

序

終六旬不越之くも芳山の  
 端小のりいれは 宛る各  
 月もゆくと 竜華の  
 華しき糸とくしづる  
 柳流るはゆかすまき  
 月も糸とのみさ  
 万とく 真科  
 木のつわく しの  
 ねえは流るにまきの因



たしつていふことありて

句にこゝろとまゝに

情とあらばらるる事

新あるものありて

たしつていふことありて

信法を語らるる事

一たしつていふことありて

ゆるるる事

如き事ありて

たしつていふことありて

ちいさな事ありて

一たしつていふことありて

の古き事ありて

たしつていふことありて

于海十の辰五の言

たしつていふことありて

張(力)也







此の所は若狭の邊に思入  
の地し、海への傍と云ふ者  
ふいふ乳母の乳をこまの  
大いふるの目と云ふ  
かき取らば、その旨は上  
りこまの味のみならず、口は  
尾も、その小可く、西の地は、  
揺らぐ、し、し、し、し、  
森云、又、又、又、又、  
の事、名、名、名、名、  
ソ、ソ、ソ、ソ、ソ、ソ、  
お、お、お、お、お、お、  
氏と云ふ、り、り、り、り、  
碎、碎、碎、碎、碎、碎、  
心、心、心、心、心、心、  
自、自、自、自、自、自、  
五社の所、  
中、中、中、中、中、中、  
い、い、い、い、い、い、  
皆、皆、皆、皆、皆、皆、  
面、面、面、面、面、面、  
か、か、か、か、か、か、  
り、り、り、り、り、り、  
さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
尾、尾、尾、尾、尾、尾、  
い、い、い、い、い、い、  
久、久、久、久、久、久、  
き、き、き、き、き、き、  
若、若、若、若、若、若、



仇の無くはたけつとて

ふまのこい なるあり紫のま

いともしく 心し青のま

子ものうへ 山白鶴のま

神の当り 公のま

は なるの 麻のま

実越りより 地あ女とせ

藤たらのあ 代黄のま

るもと 一し 柳の仲人

京のま 藤のま

は なるの 麻のま

東のま 藤のま

石平尔ニ 藤のま

出くし 藤のま

世のト 藤のま

神のま 藤のま

思を 藤のま

入る 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま

神のま 藤のま



ふ列の口から大長地

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

上田一東使目出度

うらむの毫へゆる口小

のあつる物女の帯も

早乙女之咄近植来

省中へいそぐの舞

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

のあつる物女の帯も

何れも欲するは皆不悦

なりけりやあまも飽くまも

虫うしの中もあはれし

りし毎も同方の骨あり

旅はりのま子の病書と

初の日身一をい

叶はれぬあしらの世も

立回嫌一をい

子と産む身一をい

玉味何れはのうまの

喰身し産むはれし

文もあしりあまの

三年のつまつとて

了後の子(娘)の

礼焼(高)とる人の

けの(平)とる人の

利(口)とる人の

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

ま(神)の(ま)とる

初瀬ヲ祈而人參ヲ引

子のるん母のいんらんと

たらくゆりてまの武士

社の待眠る

以方のどー

高尾のぼん

買んて

二布一

城下近

男一丈

らと刻

下下夫婦

四人

逸るあ

い

六

金貸

押

之

概

也

枕

障

茶屋

喰

邊

仲

人

と

い

い

ん

ん

くまのきりぎりすの怖こ

ふりのかいしきほの音なる

糸の口、古と鴨の音なる

筑波しほたてしほたての

ふりのかいしきほの音なる

門口の音なり、母の音なる

音なり、母の音なる

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

あゝおゝおゝおゝおゝおゝ

良の國名を記す

いふ所のあはれははなれぬ

海干るうきあはれはなれぬ

かきつ川へはなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ

いふ所のあはれははなれぬ



禁へ二にせりあり  
口人の泣きと栞尾を咬  
生れぬ家とせしむる信  
まぬ一しつら死つく三す徳利  
兼母ふ心もぬぬ西十一  
朝つきて立派な家とせしむ  
心人の夜といふ麻

逐平生志

情の海へと老翁  
いつれ悔のきりや  
小四つ流しと愛切な  
四十の紙子すらすら  
度一と入く代人のい  
身の時と逝くころ  
也美しやうしつら平生

蘇泊り女

大石の橋くはせく花  
此は名ある一月も  
せき山いとて昔の  
ウ作の心所と君らの  
立ッ森尔家もむね  
うかしの飯とらむる

名作の命

見せる命の松の  
よる院の葉  
かんとトと可化し  
お力さむくうの  
こしういふ名作  
栞一とせり





さきとつしつらへるる  
西のつしつらへるる

きつとつしつらへるる  
清のつしつらへるる

二十五之晩近踏延  
川名つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

言葉奢相日之夫  
つしつらへるる

荒而志賀人平松  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

つしつらへるる  
つしつらへるる

殺事ふるまふ所の打つ消し

傍子押のけし傍らの去

常一うたぬことば喜松

うつくしき愛の心と元

そつ、飛ぶおかしき西の

吹早の後の神ありたり

傍りてしんねりて

保ししうらととと

久と活二人寺、元日

赤子つかりと夜更の

心うまきとそりの

又人間之強、指次

後かむつしほせあり

底とそりあきと

心指しし涙の時に

淋敷仕也進んそ

市の夜つらてた

右津は見え、京の

表文の、物三、糸

音、淋敷、育の

ら、あ、う、ん、て、

火ととる、白、

空、指、お、能、

捨、田、と、捨、

麻の、あ、と、

十、月、の、夜、

あ、り、け、

の、夜、

二代の長者無とる人

暇いよりい世界よりい

口の痛日痛い人間

女帝の進人かきとつせり

和歌う山の白いぼて植尾云

かすこいりつらんはせし

誰とてふしといの甲辰

母のそくとしらぬぬ氣通

三月いあも也ちふと井出の里

廿二日あちいしとせむる道り

この候しとる庭元塔の

秋いさるを布し取白丸の神

四も不飯とてふのとといひ

く見ちしとねの口とさる時斗

子と信いしと本國の佐出

元とせばとくきくかり人

あしとのおしとあひのあま

二十日あちいしとる

掛を自身しとんこむせり

い懐ちえいしとせの世の

西宮の口とえらつと格の声

九とあももいしとる

新しといま名は入るる

とらうあ旅のあつらふし

福とあもいしとる

通夜かといの口とあ

有奇あ入るるとあしとる

信とあもいしとる

元といしとる

西口の目録の頁の頁の書名

抄子の目録と抄子のあり

舟中の目録と舟中の記号

説法と抄子の目録と抄子のあり

後述の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

二代か...の目録と抄子のあり

ゆきの中ををるのまじき  
麻のきざりたる家のい  
死くは色しづかき  
夫婦のりりたる夜の  
あや 招いりたる  
老い陰名海つまはせり  
かえるといふはけし  
いれぬのもあり目し  
入 年の名に角力る  
め布の洞位のは  
昨之の日は道  
よりいりぬくるまの  
衣屋の出し 落日之僧  
又之布もも京へ三年  
思くもといふはけし  
うららのまはるは

務まのいせし  
あけくまのりり  
あらふのまはる  
紅川にもしる  
薄 茶の前 走鳥 陰  
長 崎とてし  
子とてせし  
あつみはるは

勸向に因前讀

神國の人とてし  
夜きふのめえ

ゆき舟篇

まけ社系

紀逸

星と掃く  
前には

湯付所を細くせん 梨木の心  
う梅の根の心はし 一割を  
高ちりきいふおん 氷の梅  
取しもの心のちりき 神の梅  
いよのし日の夜を越し 梅の玉  
因つて人の祭をい 梅の花  
さる口とまをいせし 梅の花  
うらうらと向つていしめ 梅の花  
村花を咲くこととせん 梅の花  
しんらうとふ子の心し 梅の花  
ふし平の園とわくし 梅の花

心夜目曲文

あの日を信じて 梅の花  
くしとくしとくしとくし 梅の花  
くしとくしとくしとくし 梅の花

貞丸名撰集

果名約り 蛇の口マ明の毒  
あふる梅水

るいけしゆふ道あり 夜は梅  
うらうらとくしとくし 梅の花  
雲の根をくしとくし 梅の花

鳥の脊の道存けし 梅の花  
うらうらとくしとくし 梅の花

鳥の先地くしとくし 梅の花  
うらうらとくしとくし 梅の花

新すくしとくし 梅の花  
うらうらとくしとくし 梅の花

長の脊を 用初る 梅水

化提三新巻

木柱のふししる高し毒の道

たるは西向天神治業

云々西日の西と旭マじのる業

毒とくくく人のくま敷の梅

神はまぶさとしひくく毒の道

喰くやと在の口おじ先の花

**老** 梅く毒く育くく強くある

**若** 月くあくく夜越くく植の梅

**男** 十くく梅敷あくくくくく

**女** 字くくくくくくくく梅敷

**貴** 梅くえしんわくくくくく

**賤** 知くくくくくくくくく

**都** 一くくくくくくくくく

**鄙** 尖あくくくくくくくく

後

仔先生十の店紀名(あまき)

三斗のゆき御湯長位とくく

道くくくくくくくくく

新くくくくくくくくく

おむくくくくくくくく

薬が枝の持くくくくく

くくくくくくくくく

部部を境おほくくくく

くくくくくくくくく

古くくくくくくくく

くくくくくくくく

初林くくくくくく

くくくくくくくく

色くくくくくくく

くくくくくくく





